

## GAO 通信 第8号

51年5月12日発信 新田 尚

この所、ジュネーブもすっかり暖くなり、この間までの冷えびえした感じがウソのようです。いよいよ初夏の訪れでしょうか。

先信でも書きましたように、5・6・7月に大きい決議機関の会議が開かれますが、その下の、実務的な意味をもつ会議が4・5月に開かれ、FGGE を中心とする GARP の実施面を支えています。

先ず、FGGE の観測体系に関して、3月末から4月初めにかけて米ワシントン D.C. で Carrier Balloon システムの検討がなされ、FGGE の本番に間に合わないので飛行機からのドロップ・ゾンデに切り換えるという大きい決定がなされました。これは新しい技術の開発というものの難しさを示していると思います。Constant Level Balloon (CLB) は財政的な問題はあるものの、技術的には着実に進んでいるようです。CLB と浮遊型ブイについての専門家会議が4月末パリで開かれました。

次に、データ処理体系については、5月に入って Level II-b Data Production と FGGE 全体のデータ管理に関して、それぞれ会議が開かれることになり、後者は明日(5月13日)開会します。研究用の Level-II の資料を収集し処理するセンターをどこにおくかが前者の中心議題でしたが、大体みとおしがついたようです。次信にくわしく報告したいと思います。日本などは地域センターとして、これを助けていくことになっています。

数値実験計画の関係では、4月に英エグゼターで第13次作業委員会が開かれ、「気象衛星資料の精度」、「飛行機観測の精度」、「データ処理」、「実験予報の検定」、「気候力学サブ・プログラムに関連した数値実験」、「他のサブ・プログラムに関連した数値実験」、「FGGE データ・セットの利用」等について討論されました。特に気候力学では、海洋学会と共催で来春ヘルシンキで、Joint JOC/SCOR Study Conference on General Circulation Models of the Ocean and their Relation to climate が開かれる予定です。これ迄、FGGE の準備のために仕事をしてきたこの作業委員会も、FGGE の実施段階が近づくとつれてその性格変更を要求されることとなり、

再組織化がはかられており、FGGE データの利用、気候力学といった方面の仕事をしていく予定です。

この作業委員会の集りにひきつづいて、同じくエグゼターで GATE の研究成果発表もかねて、『熱帯地方のための数値モデルの開発に関する研究会議』が開かれました。GATE の方のデータ処理が遅れている関係もあって、GATE データの利用については余り具体的な発表はありませんでしたが、最近、非常に精力的に仕事を重ねられている低緯度地方の数値予報やハリケーンと台風の3次元モデルの結果からみて、十分のデータ網さえあれば中緯度と同じ程度に(とり入れるファクターの重みは違いますが) real data を用いた数値予報ができるみとおしがついてきたようです。この研究会議が目的としたのは、こうした現状の総合的分析と将来展望ですが、問題が大きく、不参加の研究者、研究グループの意見もとり入れねばなりませんので、さし当り preliminary な報告書を GARP Programme on Numerical Experimentation series (青い表紙のシリーズなので別名ブルー・シリーズ)の一冊(多分 No. 13)として印刷し、最終的な報告は GARP Publication Series から出す予定です。

サブ・プログラムについても、多岐にわたって計画がすすめられています。既に研究段階に入った GATE は、平均約6カ月ぐらいデータ処理が遅れていて、これを中心にその対策をねり、また研究者の相互交換計画をすすめるために、5月4～6日ジュネーブで Tropical Experiment Board (TEB) の第8次会議が開かれました。気候力学の方は、4月5～7日プリンストンで気候学研究のための Global Data Base (データ・セットよりもっと一般的な資料群)をつくっていく作業委員会が開かれましたが、過去のデータの一部分が破棄処分される危険も生じているため、早急な対策が必要となっています。モンスーン関係では、Monsoon-77 Experiment の計画会議がスリランカ(旧セイロン)のコロンボで5月17～21日開かれます。次信に報告できると思います。そのほか、1979年に FGGE と併行して実施する

(41ページにつづく)

っていることも事実です。

また大会の会期を延長したり、会場数をふやす等の方法はもちろん講演企画委員会では検討済みです。気象庁内で大会を開く場合、3会場3日間というのは、現実実行可能な限界で、これ以上会場を確保することは気象庁の業務運営上からむりです。また民間などの会議室を借りる場合には経済的な問題がある上に、3日3会場を借りるのさえも、会場さがしに苦勞して1年以上も前から予約しているのが実状です。かつて4日間大会を開いたことがあります、そのときに現地で世話をしていた

だいた方々から、「気象学会の重要性を 考えて 献身的に努力したが、やはり3日が肉体的にも限度である。今後は絶対に4日にしないで欲しい」と強く言われました。

このような諸条件を考えた上で、春季大会、秋季大会との関連をどうするか問題は残りますが、理事会では分科会方式について討論しています。この点について多くの会員から具体的な提案や意見が寄せられますようお願いいたします。その他、大会運営全般についても今後建設的な意見をおよせ下さるよう期待いたします。

---

(42 ページより続く)

MONEX, 6月のJOCで最終承認を求める West African Monsoon Study の計画案はひきつづいてねられています。POLEXの方は、やはり5月17~21日、カナダのトロントで計画会議が開かれます。内容は次信でお知らせできると思います。懸案の山越え気流 (Air Flow over and around Mountains) の件も、6月のJOC

での正式承認をめざして研究会議と計画会議が5月4~10日ユーゴで連続して開かれ、lee wave と小スケールの山の影響のパラメタリゼーションの2つのテーマに示ぼる方針と、ヨーロッパ・アルプスを中心とした観測区域の決定をみたようです。これもまた、くわしくは次信にゆずりたいと思います。では又。